

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	遠藤 光暁
論文題目	『脈訣』ペルシャ語訳の元代中国音研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は中国の医学書『脈訣』のペルシャ語訳(1313年の書写)に含まれる中国語の音訳に反映した元代中国音を論じたものである。この訳書はラシード・ウッディーン『キタイの諸学術に関するイルハン国の珍しい宝の書』(『宝書』と略称)に収録されたもので、中国語の訣(一種の詩)および中国医学の用語や人名が多く音訳されている(音訳部分のみ朱写)。通常のアラビア文字のほか、中国音表記用の特殊文字も考案して当時の中国音を精密に表しているため、中国側の資料からは何うことの困難な音価の細部までを見てとることのできる貴重な資料である。この資料に対する研究は今までもあったが(Dragunov 1931など)ごく部分的なものであった。本論文は延べ字数にして一万字近い音訳字をすべて整理分析、文献学的にも完備した全面的な音韻研究である。</p> <p>第1章「序論」では、まず中国語史に関連するペルシャ資料を概観し、それらが中国語音韻史、特に元代音研究において果たす役割や性格について検討。対音資料研究の方法論も考えている。第2章「文献学的研究」では、『脈訣』の諸本のこと、そのペルシャ語訳である Aya Sofya 3596 の写本(原稿本そのものと推定)のことを詳しく紹介し、ペルシャ語訳『脈訣』の底本の問題を論じている。第3章「ペルシャ文字の転写と音価」では、ペルシャ語訳『脈訣』に使われた(ペルシャ語表記用の)一般のアラビア文字、および中国音表記用の特殊文字の一覧表を提示、厳密な転写法を定めたうえ、それらが反映する音価も推定している。</p> <p>第4章からが本論である。まず「声母の対応」では、伝統的な中国音韻学の分類を活用して、中古音との対応状況が詳細に検討される。大部分の声母は典型的な近世北方官話の対応を示すが、時に南方方言的な対応も現れる。喉音声母が韻母の直拗に応じて異なった文字が使われることについて、ki-,xi-のような音のうちxi-の口蓋化が目立っていた可能性を提示、tsi-,si-の系列についても口蓋音化する話者がいた可能性を提示した。</p> <p>第5章「韻母の対応」でも、伝統的な十六摂・開合・等位に基づき、中古音との対応関係を分析。山威効三摂の二等(牙喉音)と三等の違いが-ian/-ien、-iam/-iem、-iau/-ieuの区別としてほぼ保たれていること、山摂一等合口の多くの字が-uanと再構されること(元代に一般的な-uonも見える)、止摂三等開口歯頭音(「子」など)の字が-iz/-zのような書き方をされること、話者によっては音韻変化のより進んだ対応も見られること、など、すべてが元代音の細部までを生き生きと伝えるものである。入声関連の議論も興味深い。大部分の対音において(中古音の)入声韻尾はゼロあるいは-i,-uになっているが、少数ながら-p-t-kに対応する例もあること、そのほか-tが-lと交替する例、-kが-ngに対応する例が見られることが指摘される。</p> <p>第6章「声調の対応」は、アラビア文字表記を通して元代中国語の声調の実態を探ったもの。上声の字の場合、声門閉鎖音を表すと推定される記号ハムザが音節の中間(たとえば「裏」li-iのハイフンの位置)に使われることが多い点に着目して、現代北京語の第3声と類似する調値を推定、また、重子音を表すシャッダの位置に注目して、陽平声や去声の調値を推定した。声調表示の習慣のない文字を声調の再構に役立てる研究方法を模索したものとして注目される。</p> <p>第7章「話者・音訳者・書写者の識別」では、音訳に反映した音韻特徴に基づき、話者としての中国人協力者が複数(主にA・B・C・D・Eの5人、主層はA、次にB)いたことを考証。また、表記の違いに基づきペルシャ人翻訳者も複数いたこと、更に写本の筆跡に基づき書写者も複数いたことを考証。写本の巻別との対応を明らかにした。音韻史的研究と編集史的研究を見事に結合</p>	

氏名 遠藤光暁

させた成果として高く評価される。

第8章「音節総表」は話者Aの部分に現れた全音節の推定音を体系的に一覧できるようにしたもの。別に、話者Bの部分の入声音節の一覧表も作成。

第9章「基礎方言」では、協力した中国人話者の基礎方言をそれぞれの音韻特徴から推定した。標準音としての大都（北京）音の混在も念頭に置いたうえで、話者Aの基礎方言は安徽・江西ないし西南官話、話者Bは江西北部か中部の贛語、話者Cは長江流域の方言、話者Dは呉語、話者Eは江淮・西南官話と推定した。更に『宝書』自体の記述から音訳者や話者の具体名を探っている。

第10章「結論」では、元代の『中原音韻』などの漢人の資料や『蒙古字韻』などのパスパ文字資料と比較しつつ、本資料の持つ独自の価値について総括している。

資料篇では、本論文の議論の基礎となる全データが「出現順音訳総表」「中古音順一覧表」という形で列挙される。比定された各漢字に対し、ペルシャ文字音訳の写真、ローマ字転写、出現箇所情報が示されている。漢文資料との対照のもと（時に対照不可能な状況もある中で）漢字への比定を行なった成果であり、これ自体が一次資料の記述的研究と言えるものである。

以上のとおり、本論文は『脈訣』に関する音韻史的・文献学的研究として大変精密で周到なものである。このような所謂「対音資料」を扱うには両言語（今回の場合、中国語とペルシャ語）の音韻史への透徹した理解が必須となる。執筆者がそれをよく成し遂げていることは巻末の文献目録からも充分伺われるところである。ラシードの翻訳活動全体の中での位置づけ、底本に見える避諱、翻字の原則や方法などの面でなお検討の余地は残るものの、本論文が中国音韻史研究、特に元代中国音の研究、ひいてはモンゴル帝国時代の言語文化交流史の研究に対して大きな貢献を為したことは確実である。よって本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

2015年12月5日

公開審査会開催日	2015年12月5日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学教授	古屋 昭弘	中国語史	博士（文学）早大
審査委員	早稲田大学教授	柳澤 明	近世東アジア史	
審査委員	京都大学教授	吉田 豊	言語学、イラン語史	
審査委員	創価大学教授	水谷 誠	中国語史	博士（文学）早大
審査委員				